はじめに

本校では、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた数年前に、前任の佐藤校長先生の英断によって、学校研究及び学部研究を廃止することとなりました。そのようにした理由は、幾つか考えられますが、本校のように教職員を多く抱える特別支援学校においては、研修対象となる教職員が毎年 20 名を超え、初任者研修者や中堅教諭等資質向上研修などの悉皆研修が充実し、研究授業だけでも毎月複数回実施されています。そのことによって、教職員の専門性向上の研究実践が推進される仕組みができ上っていたことも研究廃止の一因であると推察されます。また、現職研修においては、「教育課程の改善のための研修」、「肢体不自由のある児童生徒の自立活動を充実させる研修」、学校教育全体に求められている「ICT の利活用にかかる研修」など、本校の課題を意識し、重点的に専門性の向上を推進してきました。さらに毎年、教育実習の受け入れを 10 名以上、教員免許状の取得にかかる介護等体験、県立高等学校からの教育基礎コースなどの研修、看護大学等の学校参観等の受け入れなど、職員の専門性が問われる機会も増えてきています。一方で、社会全体で働き方改革の推進が求められ、教職員が授業の充実に取組ながら、研究や研修を進めなければならないことが大きな課題となっています。

現行の学習指導要領においては、子供たちに「生きる力」を育むため基本的な考え方として、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」という視点が挙げられています。私は、教職員自身もこれらの視点を意識し、より良い授業づくりを実践するために、自らが「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を実践できることが重要であると考えています。つまり、特別支援教育を含めた教育のスペシャリストとして、「見通しをもって、粘り強く取り組む力」や「自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力」、「周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想力」などの資質・能力を高め続けていくことが必要となります。

そこで、今年度は、研究主任の藤村教諭と建設的な対話を繰り返し、教職員の負担を増やすことなく、主体的な専門性の向上を模索して、たどり着いたのが、新たな「袖学の実践」です。本実践は、筑波大学附属桐が丘特別支援学校の取組からヒントをいただき、個々の教職員が興味・関心をもった課題について、「主体性」、「チャレンジ」、「横のつながり」、「働き方改革」という 4 つのコンセプトの下、単独またはグループで 53 の実践を展開し、振り返りをして成果と課題をまとめています。手前みそになりますが、新たな取組のスタートの初年度であったため、大きな成果は期待していませんでしたが、提出された実践報告を目の当たりにして、本校教職員の一人一人の研修意欲と課題意識の高さに驚きを感じるとともに、来年度以降の資質・能力の向上に期待を寄せているところです。

結びになりますが、本研修の実践に際して、御指導くださいました研修講師の皆様方には深く感謝するとともに、引き続き、御指導・御鞭撻を賜りますことをお願い申し上げます。

千葉県立袖ケ浦特別支援学校
校　長　　伊　藤　　康　弘